

みつはし ちかこ
花ものがたり

みつはしちかこ 花ものがたり

著者との協定により検印廃止

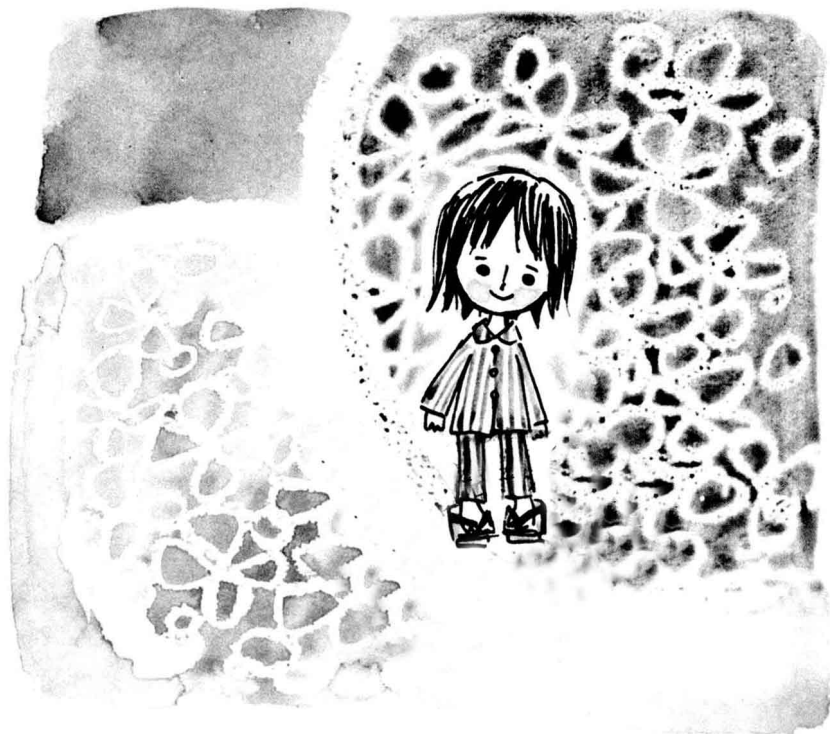
著 者 ©みつはしちかこ
発 行 者 下 野 博
印 刷 廣濟堂印刷株式会社
発 行 所 立 風 書 房

東京都品川区東五反田3の6の18
電話 東京(447) 1191代表
振替 東京74493 千145

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0092-8773-8909

花ものがたり



みつはし ちかこ

目 次

春

春のあいさつ……………8

みずいろの便り……………12

花の翼……………18

沈^{じん}丁^{てい}花^け……………20

夏

あの子……………24

黄色い花明り……………30

ひとりぼっちのおしゃべり……………36

さるすべり……………42

秋

じゅうず玉の原っぱ……………46

井戸のほとり……………52

風の匂い……………58

彼岸花^{ひがなばな}……………60

冬

だれもしらないこと……………68

日暮れのさざんか……………72

はるかなるクリスマス……………78

白いピリオド……………82

春

雨の街角にて……………90

早春の詩^{うた}……………96

春

春のあいさつ

年があけたというのに

どうして こう

心が重いのだろう

街ゆく人たちは みな

よそよそしくって

青空はまだ

挨拶にもでてこない……



さりげなく出した

年賀状は

どうしちやったのだろう？

ウンともスンともいわないで

ああ くだらない年賀状ばかり

ドサドサ運んでくる

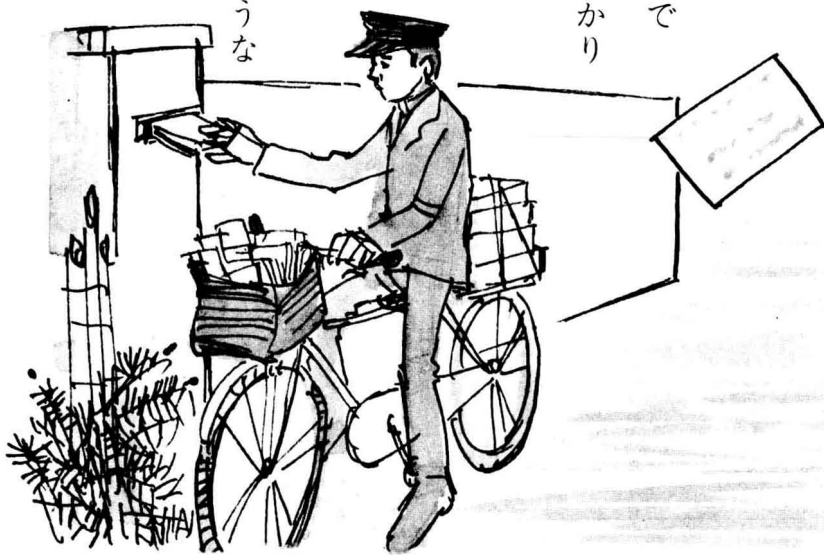
にくたらしい郵便配達――

ヤクザのように

わざと人にぶつかって

インネンつけてやりたいような

そんなうつとうしい日に



凍^こりかけた灰色の舗^ほ道^{どう}から
ふいに

ちいさい挨拶^{あいさつ}を送^{おく}ってきた

だれか?.....

たちどまつた足もとに

ほのかな色のさくら草

おとなしく並んで

私をみあげていました

「どーしたの?」

思わず

抱きあげました



やわらかな花びらに

ほおを寄せると

あかるくさわいで

かすかに新しい

春の匂いがしたような……

さりげなく出した

年賀状なんか

さりげなく忘れてしまおう



みずいろの便り

春は名のみの風の寒さや
谷の鶯歌は思えど

この歌をうたうと 胸がキューンと熱くな
ってくる。北風の中を歩きながらうたうのが
いい。なんだか 無性^{むしやう}にうれしくなってくる。



ちよつと遠まわりして 知らない道を歩いて
みたくなる。

そんな日には とある 垣根の ほかつと
した根もとに 寄り集まって咲いているイヌ
フグリの花に出合ったりする。

さざなみたつ水たまりのように チラチラ
しているこの花を 初めてみつけたときのう
れしさ!! あたりにはたいてい だれもいな
いから「まあ お久しぶり!!」なんて声をか
けたりしてしまう。私の大好きな花のひとつ
である。

山の彼方^{かた}から ゆっくり歩いてくる春のそ
らいろのドレスの裾^{すそ}が 風に吹きちぎれて
彼女よりも一足先に 山を越えて飛んできた
のではないかしら。それが この日だまりに
ふわりと落ちて……。

小さいけれど よくみると なかなかきれ
いな顔をしている。透明な光ばっかりたべて
なんの影もない 花の赤ちゃん——まだ こ
とばなんか知らなくて そよ風や 雲や



星や 雨なんかとても仲よしで
きどき “ひとりで笑っている”と思
うのは間違いで これは 彼らとおし
やべりしているときなのだ……等々
楽しい空想をさせてくれる花なのであ
る。

この花は早春から初夏ごろまでと
花期は長いけれど いろんな花々が咲
き始めるころになると 急に 生気を
失ってしまう。——私の目が移り気の
せいかな？

とにかく イヌフグリは 花の気配
のないころに咲いているのがいちばん
元気がいい。

この花をみると 思い出す人がある。
色白で一見 ひねくれた文学少女に
みえたMさん つきあってみると 気
性の激しい さみしがりやのかわいい
人であった。高校時代の一時期 ひど
く気が合って 毎日のようにいっしょ



に帰った。

話が尽きず 私は自分の家の前をすどおりして 重たい鞆かぶとをぶらさげたまま ずいぶん遠くまで 歩いたものだった。

ふたりが好んで歩いたのは 線路づたいの細道 いつも雪解けでぐちゃぐちゃだったから 道ではない枯れ草の上を歩いた。

こんなに遠まわりしてみても話したらず 別れがたいときには 線路を渡って むこう側の 立ち入り禁止の土手へ 手をつないで降りていった。

そこは 枯れ草ばかりぼうぼうとしていて 風のこない あたたかなところだった。もうじき 土筆つひしや蓬ももぎの どっさり採れる秘密の場所だった。

ここに腰をおろし 日が落ちるまで だれにもみつからず ふたりっきりで話しこむのだ。

